

## 序章 本書の狙いとその性格について

著者	佐藤 章
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	584
雑誌名	新興民主主義国における政党の動態と変容
ページ	[3]-21
発行年	2010
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00011516">http://hdl.handle.net/2344/00011516</a>

## 新興民主主義国における政党の動態と変容



## 序 章

# 本書の狙いとその性格について

佐藤 章

### はじめに

発展途上地域<sup>1)</sup>においては、20世紀の後半に、脱植民地化、軍政・権威主義体制からの転換、冷戦終焉に伴う共産党一党支配の崩壊などが進み、その結果として、国民の広範な政治参加と、複数政党による競争を柱とする、代議制民主主義の制度をとる国家が数多く誕生（ないしは復活）するに至った。かくして、「選挙に際して提示される公式のラベルによって同定され、（自由選挙か否かを問わず）選挙を通じて候補者を公職に就けさせうるあらゆる政治集団」（Sartori [2005 (1976): 56]）としての政党は、今日、グローバルに見られる存在となった。

もちろん、現実の政党は、いま述べた最小限の定義では触れられない、組織形態、政治的主張、活動内容、政治的な役割と機能などにおいて固有の特徴を持つ。そして、それぞれ特徴を異にする諸政党から成り立つ政党政治と政党システムもまた、各国各様のあり方を見せるものである。政党、政党政治、政党システムは、日々の政治動向に深く関与しており、それぞれの国において出現している民主主義のあり方を理解する上でも核心的な重要性を有する。政党をめぐる個別状況の理解は、政治研究にとって欠かすことのできない課題である。

以上の認識に立って、発展途上地域における民主主義国——その質の評価

はさておき、複数政党による代議制民主主義の制度が導入されている国——を対象とし、最新の動向にとくに焦点を当てながら、政党をめぐる個別状況の解明と分析に取り組んだのが本書である。本書は、一国研究に力点を置く地域研究アプローチと、より一般性のある議論の構築を目指す比較政治学アプローチをとる研究者が共同で執筆している点に特徴がある。そこに込めた編者の狙いは次節で述べるが、このため、後者のアプローチにおいて一般的な、問題意識と分析手法を厳密にそろえた比較研究という構成はとっていない。本書の主眼はあくまで、発展途上国における政党をめぐる個別状況の解明にあり、全体としての体系性や統一性よりも、各事例国の事情を踏まえた執筆者独自の問題関心に徹した探求が基本となっている。

ただ、本書でとりあげた事例国は、近年における民主主義への移行もしくは多元社会というキーワードが該当する点に共通点がある。この2つのキーワードはいずれも、政党政治と政党システムのあり方を含む、広く政党に関わる今日の具体的状況に深く関わるものであり、各論文ではこのキーワードに関わる状況を視野に入れた問題視角が設定されている。この点で本書は、各論文の個性は相対的に高いものの、多元社会状況にある発展途上地域の新興民主主義国について、政党に関する重要な問題領域と論点を、最新の情勢を踏まえて提示したものとなっている。

この序章では、まず、第1節でこのような事例研究集を上梓することにした狙いを、本書のもととなった研究会の構想に立ち戻って説明する。続く第2節では、所収論文の概要を紹介する。最後に第3節で、本書で扱った事例を通して浮かびあがる、発展途上国の政党をめぐるいくつかの問題領域について編者の立場から整理し、本書の意義に関する説明としたい。

## 第1節 研究会における狙い

本書は8編の事例研究からなり、各論文が1ないし2カ国を取り上げて、

それぞれの国における政党をめぐる個別状況の解明に取り組んでいる。取り上げられている国は、レバノン、イラク、南アフリカ、ケニア、コートディヴォワール、ブラジル、アルゼンチン、エクアドル、ボリビア、マレーシアの10カ国であり、中東、アフリカ、ラテンアメリカ、アジアという発展途上地域の主要地域から横断的に選定している。前節で触れたとおり、これらの事例国は、多元社会であること、もしくは、近年の民主主義への制度的移行に伴う諸変化を経験していることのいずれかが、最近の時期における政党をめぐる個別状況と深く結び付いている点で共通している。

地域横断的な視点に立った政党研究は、近年、徐々に隆盛を見せ始めている。もともと、発展途上地域の政党に関する研究自体はかなり盛んに行われてきたが<sup>(2)</sup>、発展途上国を地域横断的に視野に入れた政党研究は、LaPalombera and Weiner eds. [1966] を始まりとして早くから着手されてはいたものの、その後しばらく低調であった（例外的に1980年代の試みとしてRandall ed. [1988] がある）<sup>(3)</sup>。それが、2000年代に入ってから、新興民主主義という観点から、対象国を地域横断的に選定した比較研究が相次いで発表されてきている（例えば、Diamond and Gunther eds. [2001], Mainwaring and Torcal [2006], Webb and White eds. [2007]）。本書は、このような近年の研究動向に見られる地域を越えた比較ないしは対照、ならびに地域を異にする研究者同士の対話という方向性に沿って構想されたものである。

ただ、いま挙げた近年の研究はいずれも比較政治学の正統的なアプローチに則り、新興民主主義国における政党の機能ないし役割もしくは政党システムという明確な問題設定のもとに比較研究を行っている。これに比べて、本書はすでに触れたとおり、全体を統括する明示的な問題設定はせず、問題意識（切り口）、方法論、調査事項において各論文それぞれの独自性を重視する構成をとった。これは本書のもととなった共同研究会発足時から編者が抱いていた研究上の狙いを反映したものである。

本書のもととなった共同研究会は、対象地域を異にする研究者同士の対話の場として設定されたことに加えて、対象国（とりわけ一国研究）の政治情

勢の綿密なフォローに力点を置く地域研究アプローチをとる研究者と、より一般化されたレベルでの議論への貢献に力点を置く比較政治学アプローチをとる研究者の対話の場であることを意識して組織されたものである。このため発足当初から、問題意識、方法論、調査事項などにおけるばらつきは想定されていたわけであるが、意識的にそのような構成をとったのには、編者の側における次のような考えと狙いがあった。

編者は主にアフリカを専門地域として、上記の弁別で言う地域研究アプローチに立って研究を行っているが、日頃の研究のなかで次のような研究上の障害を認識していた。アフリカ諸国や中東諸国が典型的だが、ごく近年に民主主義への移行（ないしは再移行）が起こった国々においては、民主主義の長い伝統を持つ国々（典型的には欧米諸国）とはかなり異なった様相をみせる民主主義が展開されているとの一般的了解が存在する。制度的移行の結果として現にそこにある政治体制を民主主義と呼ぶことに対する留保を示す、カッコ付きの「民主化」という表現は、このような一般的了解の存在を端的に示すものである。実際、これらカッコ付きの「民主化」国における政党は、組織的実体の欠如や軍事部門の保有といったように、一般的な政党イメージからかけ離れた「異形」の様相をしばしば呈しもする<sup>(4)</sup>。

地域研究アプローチに忠実であろうとすれば、この「異形」ぶりを丹念に描き出すことに十分に研究上の意義がある。しかしながら、より一般化された概念との関連付けがなされないかぎり、その成果が他地域を扱った研究や理論的研究との接点を欠いたまま孤立してしまうことは否みがたい。そのため、一般化された概念との関連付けという研究課題が浮上するわけだが、そもそも、既存の理論的枠組みや概念が練り上げられるもとなつた諸現象（端的には、確立された民主主義におけるもの）と、目の前の「異形」の政治現象とのあいだに、一見大きな性質の差があるように見える以上、理論的成果を直接に適用することが果たして妥当なのか、という悩ましい問題がさらに浮上することになる。

対象国の政治情勢の綿密なフォローに力点を置く地域研究アプローチをと

る研究者と、より一般化されたレベルでの議論への貢献に力点を置く比較政治学アプローチをとる研究者の対話の場の設定という形で研究会を組織したのは、このような悩ましい問題を打開する糸口をつかみたいという狙いに立ってのことであった。そこでまず、一般化された議論を参照する以前に、まずは等しく事例研究というレベルにとどまって、具体的な論点の突き合わせという形での相互接近を期待したのである。

本来であれば、このような作業を踏まえて共通の問題意識を確立し、十分に体系的な成果へまとめ上げることが課題となるはずであるが、発足から最終成果提出まで実質わずか1年10ヶ月という研究期間と、編者の力量不足の故にそこまで到達するには至らなかった。しかし、次節で概要を紹介するが、本書所収の各論文はそれぞれの方法論と問題意識に依拠した水準の高い研究成果となった。いずれも、今後の体系的な議論に向けた論点を盛り込んだ事例研究となっている。

## 第2節 本書の構成

本節では、本書に掲載した事例研究について、概要を順に記すことで紹介したい。

第1章「ポスト・アパルトヘイト期における南アフリカの連合政治——「国民党／新国民党」解散をめぐる政治過程を中心として——」は、1994年の全人種選挙の実施によって画されるポスト・アパルトヘイト期において、アパルトヘイト体制を築き上げてきた南アフリカの国民党／新国民党（1997年に党名変更）が党勢を低落させ、ついに解散に至る過程に焦点を当てている。これは、ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおける連合政治（coalition politics）の動態とその帰結を、政党をめぐる制度と政党への支持・動員の変化の観点から考察することを狙いとしたものである。同章では、「戦略なき連合の繰り返しによる自らの存在理由の喪失」と総括される国民党／



新国民党の解散に至る過程が丹念に書き込まれ、さらに、制度（三層構造や離党規制）、地域的な支持基盤の変化、重要な支持母体であったアフリカーナー系秘密結社の変質などの問題が考察され、国民党／新国民党の解散に関連する論点の広がり提示されている。

第2章「国民虹の連合（NARC）という経験——ケニア第2代大統領モイの引退と政党機能の変容——」も、政党が事実上の崩壊を遂げていく過程を地域研究的な立場から再構成したものである。同章が焦点を当てるのは、ケニア独立以来一貫して政治の中心を占めてきたケニア・アフリカ人全国同盟（KANU）を2002年総選挙で破り、政権の座に就いた国民虹の連合（NARC）である。NARCは華々しく与党となった直後から、一転して瓦解への道を歩んでいくわけだが、この一連のプロセスにおいて、政党関連法を含むケニアの様々な法制度（とりわけ離党規制）がどのように関与したかを描き出すのが同章の狙いである。同章は、地域政党が割拠するなかで、政党の機能が「国政選挙での公認付与」に限定されがちであることが、NARCのような与党の短命化を生み出したとする認識を示すことで、一見非常に混乱した状態にあるケニアの政党制をクリヤーに見通す貴重な視角を提供している。

続く2つの章は、前2章とは力点を変え、複数の政党が織りなす政党政治全体のダイナミズムを捉えようとした論考である。第3章「政党の合従連衡がもたらす宗派対立の回避——戦後イラクの政党政治と権力闘争（2003年～2008年8月）——」は、アメリカ主導の武力介入によってサダム・フセイン政権が崩壊した後に誕生した、イラクの議会制民主主義体制下での政党政治に焦点を当てている。同章は、戦後イラク政治における政党間の合従連衡が、宗派連合と政策連合という2つの力学にもとづいて形成、再編されている様子を丹念に描くことで、戦後イラク情勢を宗派対立のみに還元して理解するのが適切でないことを明らかにする。さらに、2つの力学が存在することによって宗派対立の先鋭化が結果的に抑止されていることも明らかにされる。

第4章「宗派主義制度が支配する政党間関係——不安定化するレバノン（2005年4月～2008年5月）——」は、宗派主義制度と呼ばれる特異な政治制

度・体制のもとで展開される重層かつ複雑な政党間関係に焦点を当てたものである。宗派主義制度は、多様な宗派集団がモザイクのように混住する建国以来のレバノンの現状に照らして、人口比に従って各集団に公的ポストを配分する制度である。これは多極共存型民主主義の制度ではあるが、どの勢力も単独で政治的優位を占めることができないレバノンでは、政党間関係は選挙協力リスト、政党ブロック、諸ブロックから成る陣営という複数の水準で複雑かつ頻繁に再編されることとなり、結果的として不安定な政治情勢を永続化させていることが同章では描かれる。

第5章「多民族権力分有体制下の党内抗争——統一マレー人国民組織（UMNO）の事例——」は、不安定さに特徴付けられていた第2～4章の事例とは一転して、特定政党による統治が長期間にわたって安定的に継続したマレーシアの事例を取り上げている。同章の焦点は、民族的差異にもとづく利害対立が主要な政治的対立軸を構成している分断社会での権力分有体制に向けられている。多数派民族を代表するエリートが少数派民族の利益を尊重し、結果として権力分有体制が維持されるメカニズムを多数派民族政党内部の条件から探るのが同章の狙いである。同章はその鍵が、対抗エリートとその他の幹部の利益の非対称性と、党首の持つ政治職と党首ポストの価値にあることを発見している。また、同章はゲーム理論を適用したモデルを活用して考察を展開しているが、それによって理論的分析ツールの持つ可能性を示した点も本書における同章の特色といえる。

第6章「『民主化』後コートディヴォワールにおける民族と政党——「イヴォワール人性」をめぐる各政党の対応から——」は、民族と政党の関係に焦点を据えたものである。同章は、コートディヴォワールにおける民族と政党の結びつきは、選挙の際の政治動員において顕著にみられるものの、各政党の行動はその支持基盤からほとんど制約を受けていない点を明らかにしている。また、民族は、常に選挙での動員資源となるわけではなく、自民族に有力な政治エリートが存在するときのみ政治化されることも示される。この考察を通して、民族が政党のあり方を必ずしも本質主義的に規定しておら

ず、その意味で、社会的亀裂の議論においてしばしば取られる「列柱」のイメージで民族を捉えることが適切でない場合があることが主張されている。

第7章「アルゼンチンとブラジルにおける政党政治の変容と民主主義——州レベルの「伝統政治」という視角からの考察——」は、1980年代以降、民主主義への移行と新自由主義改革という「二重の移行」を経験する中で、時を同じくして顕在化した相次ぐ左派政権の誕生について、政党と政党システムに着目して分析を試みたものである。同章は、「左傾化」と一括される傾向の中にも、国によって急進左派政権と穏健左派政権の違いがあることに注目し、その差が政党ならびに政党システムのあり方と密接に関わることを、アルゼンチン（急進左派の例）とブラジル（穏健左派の例）の事例を通して考察している。ここで考察の焦点となるのは伝統政治の継続と脱却である。これは同じラテンアメリカに位置するアンデス諸国を扱った第8章でも重視されている現象であるが、地域内に共通する特定の傾向のもとで展開される政党政治の検討は、「政党研究における地域的文脈」という重要なテーマを指し示しており、興味深い。

第8章「政党政治を乗り越える？——ラテンアメリカにおける「社会運動」の政治的潜在力とその限界——」が、焦点を当てるのは社会運動である。新自由主義的経済改革に対する社会の反発と伝統政党の相対的な凋落という背景のもとに、主に先住民運動に立脚する社会運動が選挙に進出し、政権を獲得するに至った過程を、エクアドルとボリビアという2つのアンデス諸国について検討している。さらに同章は、これらの「政党化」した社会運動がたどった軌跡を、続く時代に台頭したポピュリズム政治家との関係から評価、分析を試みている。同章は、ラテンアメリカに広く該当する時代的条件のもとで政党政治に見られた特徴を2国間比較を通して浮かびあがらせた点とともに、他の論文であまり取り上げられていない社会運動について、選挙職をめぐる政治の担い手という観点から着目した点に特色を持つ。

### 第3節 今後の研究に向けた問題領域と論点

以上の紹介から明らかになるとおり、本書所収の論文では、多岐にわたる論点がとりあげられている。複数の論文でとりあげられているもので、今後の政党研究にとって重要な論点となりうるものを列挙すれば、①政党の動態における制度的要因の関与（とりわけ南アフリカとケニアに見られる離党規制、レバノンにおいてとりわけ明示的に出ている宗派主義的な選挙制度による政党政治の強い拘束）、②しばしば多層的な構造をとる政党間の様々な形での連合（本書の事例研究のなかでは、連合政治、与党連合、合従連衡、選挙ブロック、選挙協力、連携ポリティクスなどの様々な概念で記述されている）と、そこにおいてしばしば組織的な実体を欠く連合体が形成されること、③政党の理念的なあり方から逸脱する活動ないし組織的性格（レバノンやイラクでみられる軍事部門の保有や、アンデス諸国でみられる社会運動的な特質）が挙げられよう。

ただこれらについては論点の存在を指摘するにとどめ、編者の立場からあえて議論を整理することはしない。その代わりにここでは、本書所収の事例に広く関わる、多元社会との関係、ならびに近年における民主主義への移行との関係という2つの問題領域に沿って、今後の政党研究の糸口となる論点を整理してみたい。

#### 1. 多元社会における政党をめぐる問題

第7章を除く7つの章はいずれも多元社会において展開される政党をめぐる個別状況の解明に取り組んでいる。これらの章は、大きく、主要集団数が比較的少数で明確な多数派集団が存在するケースと、集団数が多数で明確な多数派も存在しないケースに区分することで、事例としての相互関係とそこから浮かびあがる主な論点を整理することができる。

まず前者に該当するケースとしては、第3章（イラク）と第5章（マレー

シア)がある。両章は、社会の多元性と政党制の関連について一定の現状認識を下したうえ(イラクにおいては宗派対立の深化の回避、マレーシアにおいては多数派集団と少数派集団の政策的妥協の成立)で、それに至るプロセスないしメカニズムをパターン化した形で抽出することを試みている。この2章に共通する知見は、当該社会における多数派集団(イラクではシーア派、マレーシアではマレー人)の動向が、対立の回避であれ、妥協の成立であれ、政治情勢全般のより安定的な方向付けに寄与しているということである。この2つの事例でのポイントは、多数派集団を代表する政党が一元的に組織されていない(多数派集団に依拠する政党が複数存在する)ことである。これが前提条件となって、政策に基づく連合(ないし妥協)が、社会的亀裂をまたぐ形でしばしば成立することから、多数派集団が政党政治を牛耳るような体制が成立しにくいようになっている。

イラク、マレーシアとも政治的に存在感が大きい主要集団は3ないし4であるが、これとほぼ同様の多元性のもとにありながら、政党制の様相がやや異なるのが第1章で扱われる南アフリカである。南アフリカでは、1994年の全人種選挙を経てアフリカ黒人を支持基盤とするANCが最大勢力となったが、その後もANCは、相次ぐ選挙でそれ以外の人種(白人、カラード)からの支持を着実に増やし、一党優位体制と評価されるまでに党勢を強化している。もちろん経験的には、ANCが一党優位的な地位を利用して黒人至上体制の強化に向けて動くということではなく、ANCによる統治は政治情勢全般のより安定的な方向付けに寄与してきたと言える。ただ、イラクとマレーシアの事例を念頭に置いて言えば、南アフリカにおける政党制のあり方は、存在感において他を圧倒し、かつ多数派人種からの強固な支持を受けるANCの急進化(この場合は黒人至上主義体制の確立)を抑止する機構を含んだものになっているとはいえない。その意味では、最近起こったANCからの分派による新党結成は、イラクやマレーシアに類似した形での政党システムの構築につながる面があると言えるが、はたしてそれがどのような帰結をもたらすかは未知数である。

先住民を一つのカテゴリーと見なし、「先住民／非先住民」という対立項を立てるならば、第8章が対象とするエクアドルとボリビアもまた、主要集団数が比較的少ない多元社会の例と見ることができる。先住民勢力を主たる支持基盤とする政権が樹立されたボリビアは、その過程そのものには、行き過ぎた新自由主義政策に対する異議申し立て（政策的修正）と旧来政治の場から排除されてきた先住民の政治参加による代表性のゆがみの是正という側面があるものの、先住民の利害を最優先する多数派支配の傾向を含み持つことが懸念されている（この点でANCの単党優位体制化への懸念と共通する面がある）。これに対してエクアドルでは、先住民を支持基盤とする政治勢力の分裂が起こった。これは先住民／非先住民という亀裂を相対化するものであり、ボリビア的な多数派支配からは遠ざかったと言えるが、イラク、マレーシアのように政治情勢全般のより安定的な方向付けに寄与しているかといえ、必ずしもそのような状況にはない。これは、政権側による先住民勢力の分断と取り込みが、必ずしも政策連合という形ではなく、ポピュリストの政治家による政治階層内部での多数派工作の形でなされたことと関係している。

多数派集団の動向が多元社会における政治動向の鍵を握ることは言うまでもないが、多数派集団が政党組織としてどのように編成（数、存在感の程度、他の集団との妥協への許容度）されていれば、政治情勢全般のより安定的な方向付けに寄与するのか、またこのような政党システム上の形態的特性以外にいかなる要因が関与するのか、という点は今後深めうる論点の一つと言えるだろう。

集団数が多数で明確な多数派も存在しないケースに該当するのは、第2章（ケニア）、第4章（レバノン）、第6章（コートディヴォワール）である。一般的に想定されることと言ってよいと思うが、多元性の高さを反映してケニアとレバノンでは政党の数がきわめて多い、断片化された状況が展開されている。このため政党政治は、議会における決定権ならびに大統領ポスト（選挙時）の獲得を目指した多数派形成のための連合が主舞台を占めることになる。連合の形成は、その時々々の政党間関係や政策的な懸案などへの態度に応じて

かなり柔軟に組み替えられるため、総じてきわめて流動性が高い状態が出来ている。流動性が高い状態をさらに促進しているのは、ケニアにおいては離党規制の形骸化（形式的に離党しなければ、実質的に別の政党で活動することが可能）であり、レバノンにおいては内閣と議会において少数派が有する拒否権（両機関とも3分の1を保有すれば拒否権を行使できる）である。

ただ、コートディヴォワールでは、これらの両国の経験を相対化する政党制が見られる。コートディヴォワールでは民族が政党支持の基盤として重要な意味を持つ傾向が見られるうえ、60を超える民族が存在するが、すべての民族が独自の政党形成を志向する傾向は見られない。政党政治は主要3政党から成り、それぞれ民族的な支持基盤を有する（いずれも人口比で10数%程度でしかない）が、とくに結びつきが強い民族以外からの支持も集めている。この事例は多元性の高さが必ずしも政党システムの断片化につながっていないケースであり、ケニアとレバノンにおける断片化傾向にはまた別の着眼点が必要であることを示唆している。レバノンの場合は、1940年代の独立以来（あるいはさらにさかのぼるとフランスによる植民地統治以来）固定化された、宗教・宗派に議席や公的ポストなどを細かく割り当てる宗派主義の制度がこれに寄与しているが、ケニアの場合は、現時点での理由は定かではない。ケニアにおける柔軟な連合形成は、野党勢力の一大プラットフォームの形成を可能にし、それによって2002年に政権交代が実現された。他方で選挙後は、プラットフォームが解体に向かい、政情は流動化している。

多数派集団が存在する事例では、多数派集団が複数の政党に組織されて亀裂をまたぐ連合が形成されることによって、多数派利益の急進化が回避され、政治情勢全般の安定的な方向付けにプラスに働くことが、イラクとマレーシアの例から伺えた。これとの対照で言えば、ケニアとレバノンの例から見る限り、多数派集団が存在しない断片化された政党システムの場合には政党同士の柔軟な連合は、糾合か流動化かの両極端に走りやすく、政治変動の振幅を著しく高める傾向があるといえる。政治情勢の安定に結び付くかはまた別の問題であるが、政党システムの安定性という問題を念頭に置いて、多元的

な社会において政党システムが断片化しない（例えばコートディヴォワール）条件を探ることも、今後の重要な論点になると言えるだろう。

## 2. 民主主義への移行過程と政党

民主主義への移行と新自由主義改革という「二重の移行」のもとで展開された政党をめぐる個別状況に焦点を当てた第7章（ブラジル、アルゼンチン）は、他の事例が扱っている政治的变化の今日的意味を考えるうえで興味深い視点を提起している。この章を参照点に据えることで、政党をめぐる個別状況に介在する地域的文脈の相違が浮き彫りになる。同じくラテンアメリカ諸国を扱った第8章では、先住民を支持基盤とする政治勢力の台頭の背景にあったのがまさしくこの二重の移行であったことが明確に記されている。移行の意味と具体的な影響は、国によって程度や質において差異を孕んではいたものの、大局的にはラテンアメリカの近年の政治動向がこの二重の移行と深く関係して起こったことは間違いない。とりわけ新自由主義改革は、失業に代表される社会的厚生低下を引き起こすことによって、既存政党の党勢低落と新しい政党的アクター（社会運動を基盤にしたり、ポピュリスト的動員に依拠するなど具体的な形態は様々であるが）の登場をもたらし、政党システム自体の大規模な再編をもたらすことになった。

これとは対照的に、ラテンアメリカ以外では、少なくとも本書所収の事例に関する限り、新自由主義改革が政党政治の動態に大きな影響を与えた形跡は見られない。マレーシアでは、1990年代に採用された市場メカニズム活用型の開発戦略が、ブミプトラ企業の育成という形でのレントの配分によるマハティール政権の基盤強化をもたらし、その後には、その揺れ戻しである緊縮政策によって党内対立が惹起された。しかし、これは第5章が明らかにしているように、政党に関して見る限り既存のUMNOの主導体制を大きく動揺させることはなかった。南アフリカでは、新しい与党であるANCが1996年に新自由主義的な政策を採用したことが、旧与党である国民党の政策上の



存在意義を希薄化し、後者の党勢低落の一つのきっかけとなった。ただ、それから10年以上を経ても ANC はさらなる党勢の拡大を続けており、新自由主義的政策をとった政権がその後国民から厳しい審判を下されるというラテンアメリカ的シナリオは起こっていない。

この2カ国以外のケニア、コートディヴォワール、レバノン、イラクでは、新自由主義改革は、考察の対象とした時期の政党政治の展開を左右する大きな要因となっていない。新自由主義改革は、今日のグローバリゼーションを特徴付ける要素であり、その意味では世界のあらゆる国々が一様に直面している問題と考えることができるが、現実の政治過程に介在する度合いは、地域によって大きく異なることがここからわかる。

ラテンアメリカの事例から伺えることは、新自由主義改革が、国家を媒介として維持されてきた旧来の既得権構造や社会サービスなどの配分のあり方を一変させたことで社会の反発を惹起し、そのなかで起こった新しい組織の誕生や利益代表の組み替えがさらに政党システムの再編へと波及していくという経路である。新自由主義改革が政党をめぐる問題状況として顕在化しない、もしくは一定の影響は与えるが軽微なものにとどまる（本書の事例ではマレーシアと南アフリカ）場合に関しては、ラテンアメリカ的に想定される経路連関のいずれかの要素が、決定的に異なっているという観点からアプローチすることが可能であろう。ラテンアメリカ諸国の例からは、既存の政党システムの組織労働者への依存度や農業部門に対する国家の保護政策などが重要なポイントとなるように思われるが、このことは当該国の社会経済状況や世界経済における位置付けなどが、新自由主義改革がもたらす政治的インパクトの大小を左右することを物語っている。またそのことは、特定の政策選択が政党システムの変化（さらにはそこに伴いがちである政治的不安定化）を惹起しやすい国とそうでない国の分岐の存在を示唆している。

新自由主義改革とは別の面に注目すると、「二重の移行」という観点は、民主主義への移行がいかなる別種の移行を随伴し、政党をめぐる問題状況に影響を与えたかという問題に組み替えることが可能かもしれない。本書にお

いて「民主化」に類するものと位置づけたレバノンでの2005年の転換はシリア支配の終焉であった。したがって、その後のレバノンの政党政治は第3章で指摘されているとおり、「ボックス・シリアーナ」後の政情の不安定化という特質を有する。つまり、今日のレバノンにおける政党制は、周辺国を含めた国際関係における変化を反映した形で展開されている側面がある。また、イラクでも、民主主義への移行はアメリカを中心とする超大国の強い影響力のもとに行われたものであった。超大国の関与は、これに反発するイラク国内の勢力の武装化と対抗のための超大国による自衛組織の育成などの形で、政治情勢の暴力化に深く関わった一方で、民主主義の機構が完全に麻痺しないよう存続させる効果も持った。また超大国が関与を続けることにより、政党間の合従連衡関係の再編において、対米容認／反米という重要な対立軸が維持されることになった。以上のことは、一国の政党政治が国際関係の縮図として展開されることを示している。これは、民主主義への移行に随伴する移行の一つのあり方として、事例国によっては国際関係における変化を考慮することが重要であることを示している。

いま述べた話題は、超大国の地政学的考慮（とりわけ9・11以後）が強く介在する中東地域ならではの地域的文脈として捉えることもできるが、超大国の関与に関しては、米国の麻薬撲滅という目的に沿って、アンデス諸国政府に加えた coca 栽培制限に向けた強い圧力も一例として挙げられるかもしれない。この圧力が、伝統的に培われた生業の禁圧に対する先住民の不満を喚起し、先住民の政治組織化に向けた一定の背景をなしたことは間違いない。

民主主義への移行に随伴して、これまで政治的、制度的に政治参加から排除されてきたアクターや社会階層の政治参加が起こった事例が、イラク、南アフリカ、アンデス諸国（エクアドルとボリビア）である。それぞれイラクの場合は亡命政党、南アフリカの場合はアフリカ黒人、アンデス両国の場合は先住民がこれにあたる。いずれの国でも民主主義への移行後の政党をめぐる状況は、この新たな政治参加の拡大の直接の帰結として現れている。とくに南アフリカとアンデス両国の場合は、民族的・人種的な寡頭支配体制から

の脱却としての性格を持つわけであり、その観点から比較研究を行う余地はあろう。

## むすび

以上、本章では、本書の狙いと所収論文の概要について紹介し、そこから浮かびあがる論点を、多元社会との関係と近年の民主主義への移行という2つの問題領域について、編者の観点から整理を試みた。本書は最新の動向を踏まえた政党をめぐる個別状況の解明と分析において、各々一貫した内容を持つ論文を収めており、発展途上国の政党について考えていくうえで豊富な知見と考察の糸口を盛り込んでいるものと信ずる。体系性という点ではたしかに至らないところがあるかもしれないが、地域研究アプローチと比較政治学アプローチの対話の場の設定という、それ自体学術的に見て少なからぬ意味がある試みの帰結としてそれを受けとめ、今後の発展途上地域の政党研究のさらなる深化に向けたささやかな足場として本書を提示したい。

### [注]

- (1) 本書では、発展途上国という用語を、おおそ欧州、北米、日本以外の地理的範疇にあつて、社会経済面における相対的な低開発状況にある国々という一般的了解に則って使用している。むろん、この用語に関しては、指示対象となる国々相互の異質性の高さや、「低開発」とは言い難い国々の増加（例えば、アジアNIEs諸国、湾岸産油国、近年のBRICs諸国）などの問題があるが、ここではその点には触れない。
- (2) サハラ以南アフリカ（以下アフリカ）地域に関して言うと、アフリカ諸国が続々と独立を遂げた1960年代から、政党に焦点を当てた研究は比較的活発であった（Hodgkin [1961], Schachter-Morgenthau [1964], Coleman and Rosberg eds. [1964], Zolberg [1964, 1966]）。また、1990年代のいわゆる「民主化」を経て登場した政党ならびに政党システムに関して、具体的な事例研究、俯瞰的な整理、比較研究の試みは、近年数多く発表されている（いくつかの例として、Kuenzi and Lambright [2001], van de Walle [2003], Salih

ed. [2003], Mozaffar [2006], Carbone [2006])。また、ラテンアメリカ地域に関しても、民主主義の制度が採用された時期が他の発展途上国より1世紀近く早く、かつ、北米での政治学研究の影響を強く受けたという研究上の土壌もあって、政党に関する研究が持続的に行われてきている（例えば、McDonald [1971], Mainwaring and Scully eds. [1995], Mainwaring [1999], Linz [2002])。また、中東、アジア地域に関しても研究は行われてきている（例えば、中東地域に関しては Tachau ed. [1994], アジア地域に関しては Sachsenröder and Frings eds. [1998])。

- (3) その理由は定かではないが、各地域固有の条件や研究上の前提条件の違いから、地域を越えた比較研究というものが相対的に難しい試みであることの反映ではないかと思われる。また、発展途上地域の多くの国では民主主義への移行がごく近年に起こったため、研究自体がこれから本格化するという時間差の問題も考えられる。
- (4) 本論文集で扱う事例で言えば、政党としての組織実体の欠如の端的な例としてはケニアのNARCが挙げられる（第2章参照）。軍事部門を持つ例としては、イラクのサドル派（第3章）、レバノンのヒズブッラー（第4章参照）がある。

## 〔参考文献〕

### <外国語文献>

- Carbone, Giovanni [2006] “Comprendre les partis et les systèmes de partis africains,” *Politique africaine*, n° 104, décembre, pp. 18-37.
- Coleman, James S., and Carl Rosberg eds. [1964] *Political Parties and National Integration in Tropical Africa*, Berkeley: University of California Press.
- Diamond, Larry, and Richard Gunther eds. [2001] *Political Parties and Democracy*, Baltimore and London: Johns Hopkins University Press.
- Duverger, Maurice [1951] *Les partis politiques*, Paris: Almand Colin.
- Escobar, Arturo [1995] *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Haynes, Jeff [2001] “Introduction: The ‘Third World’, and the Third Wave of Democracy,” in Jeff Haynes ed., *Democracy and Political Change in the ‘Third World’*, London and New York: Routledge, pp. 1-20.
- Hodgkin, Thomas [1961] *African Political Parties*, Harmondsworth: Penguin Books.
- Huntington, Samuel P. [1991] *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth*

- Century*, Norman and London: University of Oklahoma Press.
- Kuenzi, Michelle, and Gina Lambright [2001] "Party System Institutionalization in 30 African Countries," *Party Politics*, 7 (4), pp. 437-468.
- LaPalombera, Joseph, and Myron Weiner eds. [1966] *Political Parties and Political Development*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Linz, Juan J. [2002] "Parties in Contemporary Democracies: Problems and Paradoxes," in José Ramón Montero, Richard Gunther and Juan J. Linz eds., *Political Parties: Old Concepts and New Challenges*, Oxford: Oxford University Press, pp. 291-317.
- Lipset, Seymour Martin, and Stein Rokkan [1967] *Party Systems and Voter Alignments*, New York: Free Press.
- Mainwaring, Scott P. [1999] *Rethinking Party Systems in the Third Wave of Democratization: The Case of Brazil*, Stanford: Stanford University Press.
- Mainwaring, Scott P., and Timothy R. Scully eds. [1995] *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America*, Stanford: Stanford University Press.
- Mainwaring, Scott P., and Mariano Torcal [2006] "Party System Institutionalization and Party System Theory after the Third Wave of Democratization," in Richard S. Katz and William Crotty eds., *Handbook of Party Politics*, London: Sage, pp. 204-227.
- McDonald, Ronald H. [1971] *Party Systems and Elections in Latin America*, Chicago: Markham Publishing Company.
- Montero, José Ramón, and Richard Gunther [2002] "Introduction: Reviewing and Reassessing Parties," in José Ramón Montero, Richard Gunther and Juan J. Linz eds., *Political Parties: Old Concepts and New Challenges*, Oxford: Oxford University Press, pp. 1-35.
- Mozaffar, Shaheen [2006] "Party, Ethnicity and Democratization in Africa," in Richard S. Katz and William Crotty eds., *Handbook of Party Politics*, London: Sage, pp. 239-247.
- Neumann, Sigmund [1956] "Why Study Political Parties?" in Sigmund Neumann ed., *Modern Political Parties: Approaches to Comparative Politics*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 1-6.
- Randall, Vicky, ed. [1988] *Political Parties in the Third World*, London, Newbury Park, Beverly Hills and New Delhi: Sage.
- [2004] "Using and Abusing the Concept of the Third World: Geopolitics and the Comparative Political Study of Development and Underdevelopment," *Third World Quarterly*, 25 (1), pp. 41-53.
- Sachsenröder, Wolfgang, and Ulrike E. Frings eds. [1998] *Political Party Systems and Democratic Development in East and Southeast Asia*, 2 volumes, Aldershot:

Ashgate.

Salih, Mohammed M. A., ed. [2003] *African Political Parties: Evolution, Institutionalization and Governance*, London and Sterling: Pluto Press.

Sartori, Giovanni [2005 (1976)] *Parties and Party Systems: A Framework for Analysis*, Colchester: ECPR Press (First published in 1976 by Cambridge University Press).

Schachter-Morgenthau, Ruth [1964] *Political Parties in French-speaking West Africa*, Oxford: Clarendon Press.

Tachau, Frank, ed. [1994] *Political Parties of the Middle East and North Africa*, Westport: Greenwood Press.

Van de Walle, Nicholas [2003] “Presidentialism and Clientelism in Africa’s Emerging Party Systems,” *Journal of Modern African Studies*, 41 (2), pp. 297–321.

Webb, Paul, and Stephen White eds. [2007] *Party Politics in New Democracies*, Oxford: Oxford University Press.

Zolberg, Aristide R. [1964] *One-Party Government in the Ivory Coast*, Princeton: Princeton University Press.

—— [1966] *Creating Political Order: The Party-States of West Africa*, Chicago: Rand McNally.

